

[特別寄稿]

## 藍野大学と Saluti et Solatio Aegrorum

武 田 雅 俊<sup>\*,\*\*</sup>

### 1. Saluti et Solatio Aegrorum に められた想い

藍野大学は“Saluti et Solatio Aegrorum”をその教育理念として大切にしてきました。これは神聖ローマ帝国皇帝ヨゼフ II 世 (Joseph II : 1741-1790) の言葉です。ヨゼフ II 世は, その在任中 (1765-1790), 文化や学術の発展を推奨し啓蒙君主として知られた人ですが, 1784 年にウィーン総合病院を設置しました。ウィーン総合病院はウィーン大学付属病院に引き継がれ, ウィーン大学付属病院には数年前にモダンな新館

が竣工しました。新館の傍に当時からの旧館は残っており入口の銘板と, 敷地内に建つヨゼフ 2 世の銅像が手にする書に“Saluti et solatio aegrorum”の文字が刻まれています。その意味は, aeger (病人・患者) の salūs (健康・救い) と solātium (慰め) のためとなりますが, 藍野大学は「病める人々を医やすばかりでなく慰めるために」としてその教育理念としてきました。英文で言うと “To save and to comfort the sick” ぐらいになるのでしょうか。本学客員教授を委嘱したウィーン大学精神医学教授 Siegfried Kasper 教授から建物正面の銘文を指さす写真と銘文の写真を送っていただきました。



ウィーン大学附属病院旧館入口の銘文を指し示す Siegfried Kasper 教授



(一行目から二行目) Saluti et solatio aegrorum, (三行目) Josephus II. Augustus, (四行目) Anno MDCCLXXXIV とのラテン語の銘文。英語では (To save and to comfort the sick—Emperor Joseph II. 1784)

\* 前藍野大学学長

\*\* 大阪河崎リハビリテーション大学認知予備力研究センター長

## 2. 藍野大学に期待されるこれからの教育・研究活動

藍野大学では「病める人々を医やすばかりで慰めるために」の標語に込められた精神を大切に、その学問的な裏付けを確立するための教育・研究活動を進めてほしいと思います。この標語はこれからの医学・医療を読み解くキーワードとなりうる意味を有しており、藍野大学では *Saluti et solatio aegrorum* の理念を追求するための具体的な研究・臨床活動を深めて行ってほしいと思っています。患者さんを「医やす」ための知識と技術、「慰める」ための工夫と実践についての学問的基礎を形成してほしいと思っています。私は藍野大学において「心のサイエンス」という講義を担当しましたが、その意図は、*Saluti et solatio aegrorum* の精神を教職員及び学生の皆さんに理解してもらい、さらに「医やし慰める」ための実践に役立ててほしいという想いからでした。そのためには、必要な知識として「心のサイエンス」でも触れたことですが、これから医学・医療がどのように変化をしていくかを十分に理解しておくことが必要です。

## 3. 2050年の医療予測

2050年には世界人口は90億人となりの60歳以上人口は約24億人に達します。高齢者の増加により、医療需要が増大し介護・医療従事者が労働人口の約25%を占めるようになります。すなわち、働く人の1/4が医療・看護・介護にかかわることになり、「医やし慰める」ことの重要性が高まっていきます。藍野大学においては、このような職業を専門とする若い人たちに「医やし慰める」教育と研究活動を求めたいと思います。

これから発展していく治療法は、再生医療と細胞医療の領域です。再生医療の世界市場は38兆円規模に、国内市場は2.5兆円規模に拡大し、細胞医療の世界市場は38兆円規模に（2012年は1000億円）、国内市場は2.5兆円（2012年は約90億円）規模に拡大するとの経済予測があります。がんの治療法は大きく進歩し、2015年に533万人でピークに達した国内がん患者数はほぼ横ばいを続け、2050年には80歳未満のがん死亡者が無くなると予測されています。一方、薬剤耐性菌は今後大きな問題となり、世界の抗生物質耐性菌による死亡者は年間1000万人に（現状は推定70万人）膨らむと予想されています。

疾患別予測では、リウマチ患者数は遺伝子解析技術により減少しますが、世界中の骨折の50%は高齢化が進むアジア地域で発生すると予想されます。近視はデジタル家電の影響により増加し、世界人口の49.8%（約47億6000万人）が近視になると予測されています（約9億4000万人は強度近視）。なんとといっても大きな問題は認知症です。2050年には、世界の認知症患者数は現在の3倍となり1億3500万人に達し（2015年に4500万人）、アジア地域がその約半数を占めます。中低所得国の認知症患者数が世界全体の71%を占め、我が国の認知症患者数は500万人を超えるかと予想されています。高齢者、認知症患者の医療・看護・介護に最も必要なことは「医やし慰める」ことの実践ではないでしょうか。

## 4. 2050年のヒトの心

2050年にヒトはどのように変わっているのでしょうか。ヒトは都市化や技術の発達にうまく適応しているのでしょうか。2050年を生き抜くヒトには、1) 情報技術（IT）、人工知能（AI）、仮想現実（VR）などの技術を使いこなす能力、2) 情報を持っているだけでなく活用する能力、3) AIを超える発想やアイデアを生み出す能力、4) 情報を総合して正しく判断する能力、5) 都市生活の中で他人とコミュニケーションする能力、6) 異質な他人を正しく理解できる能力、7) 他人に共感する能力、8) 芸術を理解する能力、9) 情緒を味わう能力、10) 高い倫理性などが要求されるのだらうと思います。これらの心の特性を伸ばし涵養することが、これからの医療人には必要となるのではないのでしょうか。このような観点から、医療人として「医やし慰める」ことの意味を深く極めてほしいと思います。

ヒトの能力は、太古の昔は身体能力で評価されました。より速く走り、より高く跳び、より強い人が求められていました。その後、ヒトには多くの知識が求められましたが、それもコンピューターやAIにとってかわられました。おそらく2050年代に最も必要とされるヒトの能力は、ひとくくりに言うと「認知・判断能力」でしょう。ここで言う「判断」とは、論理的な情報処理で下される判断ではなく、他人の行動・判断・情緒を総合した判断のことです。他人の感性を考慮しながら、最適の判断を下す能力は、単なる蓄えられた知識によって実現できるものではありません。むしろ、不必要な情報を切り捨てて、必要な情報

を正しく評価して、そのうえで他人の行動や反応を統合した上でなされる判断が必要となるのでしょうか。さまざまなレベルの情報を統合しながら、最終的に人の生活に最適な判断を下すという能力が求められるようになるのでしょうか。社会生活でも医療現場でも適切に「医やし慰める」ことを判断できるようになってほしいと思います。

## 5. 漱石から学ぶ心

夏目漱石の小説「草枕」(1906年)は、「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」という有名な文で始まる。そして「住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらするただの人である。ただの人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。」と続いている。漱石の言いたいことは、ヒトは知情意を上手に働かせて世の中を生き抜こうと努力するが、それでも生きていくことはなかなか難しい。住みにくい世の中には、芸術が必要であり、また

住みにくい人の世の中はみんなで思いやりをもって少しでも住みやすい所にできないものかという提言であった。この草枕の冒頭は20世紀の初めにこれからの社会を予見しながら書かれたものでしたが、21世紀の生き方としてはどのような提言になるのでしょうか。

## 6. ま と め

紙面の都合もあり詳しくは述べられません。2050年代を生き抜くヒトには以下のような要件が求められるのではないかと考えています。「自分の意見を明確に表明する人、他人との約束を守り、他人を裏切らない信頼できる人、困った状態を解決するための新しい解決法を示すことのできる人、感情的に安定しており、パニックに陥らず感情的にならない、みだりに怒らない人、心が優しく、思いやりがあり、上から目線ではなく、他人の気持ちを推し量ることのできる人、多くの人から友人になりたいと思われる人、自分の考えを押し付けない懐の大きい人、家族、友人を大切にする人」など。このようなことを考えながら藍野大学の学生さんに「医やし慰める」ことを学んでほしいと思い、藍野大学の教職員には「医やし慰める」ことの学問的基礎を明らかにし、「医やし慰める」ことを究めてほしいと思っています。